

# 郷土室だより

第5号

昭和49年7月15日 初刷

平成7年3月31日 2刷(500)

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電話 3543-9025

## 木挽町居住の名家

安藤 菊 二

### 1 佐久間象山

前号に、記さんと欲して記すにおよばな  
かったのは、狩野画塾の筋向い、木挽町五

丁目、ほんの一時ではあるが、幕末の豪傑の一人、佐久間象山が居住していたことであった。上掲近吾堂版切絵図の左傍に、細字で書かれた「佐久間修理」は、すなわち象山の通称である。

象山は信州松代藩士であった。天保十年二九才の時江戸に遊学、神田お玉が池に住居し、生徒を集め、傍ら佐藤一斎の門に入した。十三年、砲術師範江川太郎左衛門の門に入り、翌年二月には免許皆伝を受けている。

弘化三年(一八四六)松代に帰り、藩命をもって野戦砲や天砲などを铸造、砲術家として声望重きを加えた。嘉永三年(一八五〇)象山は出府して深川藩邸に仮寓することになった。諸藩士の砲術を聞く者多く、この年中津藩士七十三名が入門し、幕臣、勝麟太郎(海舟)も入門した。翌嘉永四年、周旋してくれる人があって、象山は木挽町五丁目の借家に移転した。六月

十八日付で、象山が山寺源太夫に宛てた書簡に次のように記してある。

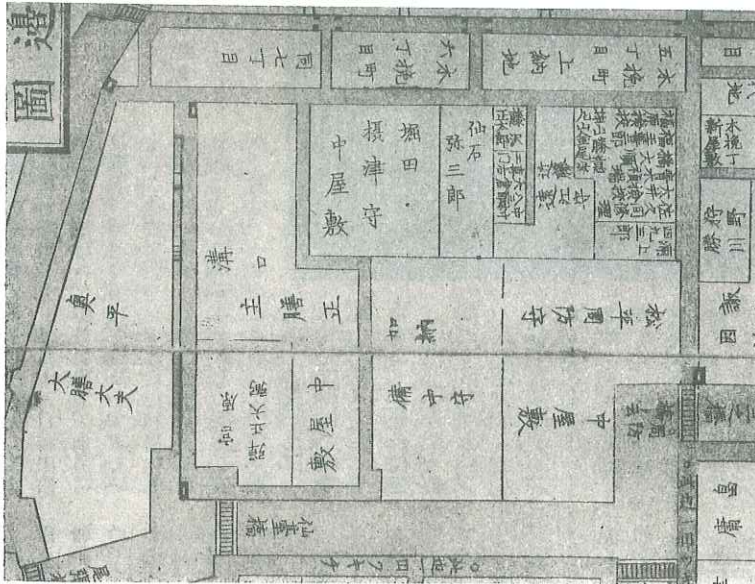
去月廿八日、木挽町の方へ相談整ひ候て引越申し候。不存寄御手充等被成下候にて、立派なる所へ罷越し、剩へ此節専に砲技出精いたし候。(中略)其上地主も諏訪莊助殿弟にて、浦上四九三郎と申人に御座候が、頗る質直の仁にて何かと都合も宜しく、既に此間も裏口より風と被尋候て、門人共砲術演習致し居候を被見候て、是にては場所尚狭く不都合なるべく候へば、今空地にて此所不用に候間、困込候て都合致し候へとて、二拾坪ばかりの所を借し被申候。(下略) (信濃教育会編「象山全集」下三九一頁一三九二頁)

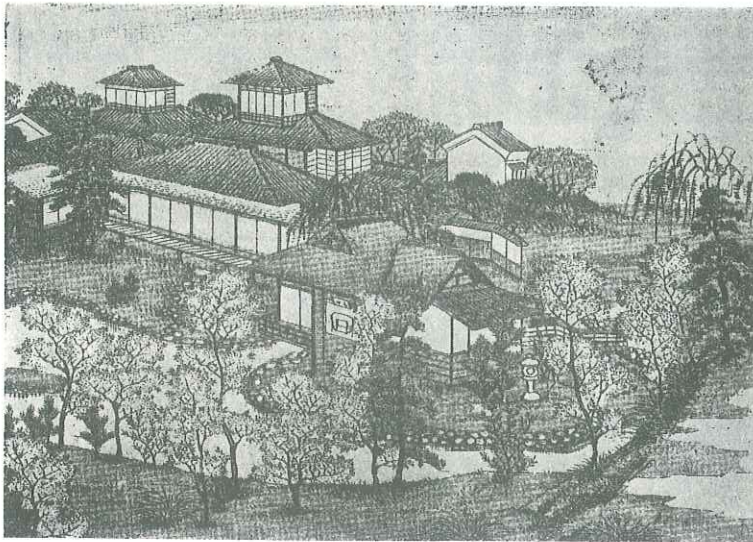
木挽町の塾は、象山個人の出入り好都合であったのみでなく、七十三人の中津藩士にとっても好都合であった。彼らの多くは象山の家を去る数町の藩邸、奥平大膳大夫の上屋敷か、鉄砲洲の中屋敷に起居していたからである。

この年、長州藩の吉田寅次郎(松陰)が入門した。後に、松陰が家兄に宛てた書簡に象山塾の活況を伝えて、

佐久間方稽古は劍銃、すだめ、大砲の打方の手続、日々盛に有之、近日入門人甚多し。又文典を読む人の多き、手後ながら西洋の事開くるは五・六年の間に在るべし。(嘉永六年九月)

と言っているので、塾の盛況を察すること





ができる。

この年十一月月上旬、象山は上総姉崎において、奥平侯のために新鑄した大砲の試射を行い、大槻磐溪は七言絶句を賦してその拳を讃した。

嘉永五年（一八五二）十一月象山は勝麟太郎の妹順子を娶った。時に象山四十二才。順子は十七才であった。

嘉永六年米艦が浦賀に来航し、天下の耳目を聳動した。九月十五日吉田松陰が象山を訪れ、国禁を犯して海外に渡航し、泰西の実状を探究してきたいという決意を語った。象山は松陰の識見と熱烈な愛国の至情に感激し、旅費を給し、激励の長詩を賦して餞別とした。詩は、「五州自為隣。周流究三形勢。一見超三耳聞。智者責投機。歸來須及辰。不立非常功。身後誰能資。」という語で結ばれていた。

翌安政元年（一八五四）三月二十七日松陰は下田に赴いて米艦に投ぜんとして果さず、雄囚空しく挫折して伝馬町の牢獄に下され、象山もまた、送別の詩から連累者として逮捕され、伝馬町の獄に呻吟する身となった。

牢獄にあること半歳、判決は下って蟄居を命ぜられ、象山は郷里松代へ護送されていった。

象山が木挽町に住居していた期間は僅々三か年に過ぎなかったけれども、激動の時代に入った歴史の齒車は、この一小天地にも深刻なわだちの跡を印し去ったのである。

## 2 溝口 侯

木挽町七丁目には、越後国新発田十万石の城主、溝口侯の中屋敷があった。当主は直溥。柳の間詰。朝散大夫。この木挽町の中屋敷は、十一代直諒の時、文化九年十一月二十四日に、千駄が谷の下屋敷と切坪相對替で、この地にあった亀井能登守と松平主計頭との中屋敷、太田彦十郎の添屋敷などを一團にして、入手したものであった。

侯はここに庭園を築造し、樹石を配置し、亭館を造営して、幽清館偕楽園と呼んだ。邸地は明治維新に際し土地され、いっさい旧物を留めない。現在の銀座七丁目一四番地から一六番におたる地域の南側がその旧地に当るらしい。この偕楽園の真景圖の模本が上野の博物館に所蔵されており、明治の中期に、江戸庭園史の研究者小沢翠園翁がその模本を作り、これを『風俗画報』第一六号に紹介された。区内の大名屋敷の邸宅圖はほとんど伝わるものがなく、稀有な一例であるから、採ってここに掲げることとした。市史稿・遊園篇第二巻にも、桜花咲き乱れる池塘を描いた一図が載せてある。併せて参照されたい。

弘化三年（一八四六）に、書家の市河米庵がこの偕楽園に招待されて、鶴和樓八景の詩を賦している。侯と文墨の交りが篤かったからであろう。

米庵名は三亥。儒者市河寛齋の男である。顔真卿風の書を能し、弟子の礼を執る者三千人におよんだといわれ、文房具・書画の奇玩名品を多く收藏していたのでもまた知られている。

八景は、東叡春望・富嶽都陽・愛宕晴雪・緑山晚鐘・総海行舟・芝浦漁火・筑波夕照・鶴樓秋月をいう。ここには通俗の文字を用いた數首を写しておこうと思う。

### 東叡春望

台嶺春彌望。群櫻花作園。一時諸法界。併在白雲端。

### 富嶽都陽

日升東海天。先射芙蓉頂。霞彩九華披。奇觀無比並。

### 緑山晚鐘

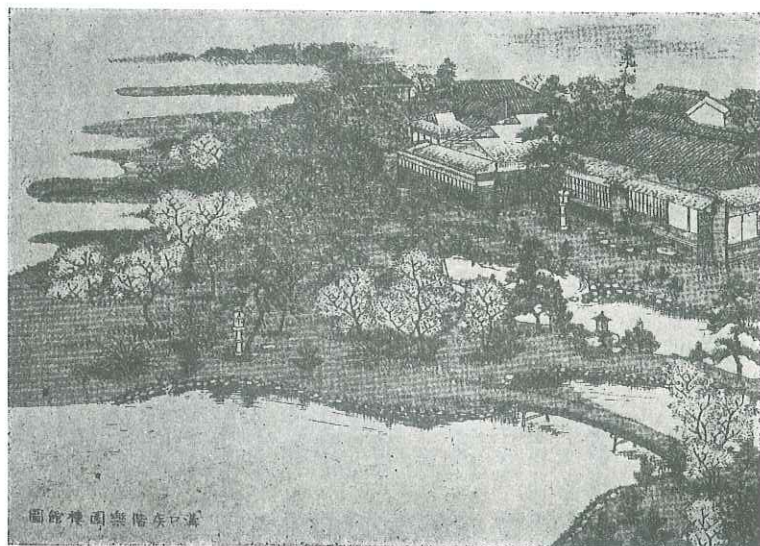
宝閣天將夕。逗林斜照江。僧鯨破昏暝。一吼萬綠空。

### 筑波夕照

雁外没鳥照。天辺現兔魄。烟凝暮山紫。人坐藤王閣。

### 鶴樓秋月





3 奥平

大膳大夫

木挽町南端には、豊前国(福岡県)中津藩主奥平大膳大夫の上屋敷があった。

畷高は十万石である。この上屋敷は延宝の頃から引続きこの地にあり、地所は現在の銀座八丁目九番地から二一番地にいたる全域を占め、維新後、通信省の用地となった所。正門は汐留川に面した河岸に開かれていた。河岸通りは將軍浜御成の時の通路でもある。浜奉行木村喜繁の自筆日記「伊豆

雲楼高百尺。吟坐月明中。僮客来相和。縦山路欲し通。  
高閣の聳立するもの稀に、天空開け樹林の多かった当時のこと、木挽町七丁目あたりにして、這般の佳景を賞するを得たことを憶うべきである。

の山ふみ」の巻頭に、家族に見送られて旅に出る浜奉行一行の先供が、一頭の駄馬を擁して、海鼠壁に添って河岸道を歩いてゆく図が載せてある。その海鼠壁に囲繞された一纏の大名屋敷が、すなわち奥平邸であった。(今泉源吉氏著「蘭学の家、桂川の人々」最終篇、巻頭口絵参照)

代々の藩主の中で、昌鹿という方が名君の誉れが高い。侯は、延享元年七月十五日江戸藩邸で出生。幼名は熊太郎、加冠して昌邦といい、のち昌鹿と改めた。国学を賀茂真淵に受けて和歌を良くし、宝暦七年に従五位下丹波守叙任、同八年大膳大夫に進む。政治向きは儒臣藤田敬所に諮問して弊政を改革し、備前の池田治政、薩藩の島津重豪と並び称された。

江戸の蘭学の鼻祖ともいべき前野良沢は、昌鹿時代の中津藩士で、鉄砲洲の奥平家中屋敷(現在明石町の聖ロカ病院の旧病棟のある一廻)に長屋住いをしていた。良沢は部屋に籠って蘭書を繙くのみで、役向きの事などいっこうに傾るところがない。同僚が面白からず思つて侯に訴えたと、侯は「あれは阿蘭陀の化物じゃ。彼の好きに任せたがよい。学業にいそしむことも勤務の内じゃからの。」そう言われて、別にとがめようともなさらなかった。これを伝え聞いた良沢は、「阿蘭陀の化物」をつづめて蘭化と号したという逸話が伝えられている。

この好学の君侯は、安永九年(一七八〇)七月二十四日、三十七才の壮齡で世を去った。跡目は男昌男が継ぎ、その跡を昌高が継いだ。昌高は実は島津重豪の第二

子で、幼名富之助。天明六年(一七八六)奥平昌男の養嗣となり、同八年(一七八八)八月三日、昌男の死去により遺領を相続した。

侯は寛政六年(一七九四)従五位下大膳大夫に任ぜられ、文化七年(一八二四)従四位に叙し、同八年侍従に任ぜられた。

天資聰明、養祖父昌鹿の遺図を承けて士民を撫育し、政治の刷新を図り、



寛政二年には進徳館を興し、文武を奨励されたが、他面和蘭の文物を愛好し「フレデリック・ヘンドリック」という和蘭名を持っていた。嗣子美作守昌暢も「マウリッツ・ヘンドリック」と称し、父子ともに和蘭文字の名刺を持つておられたという。

侍医の神谷源内も「ピーター・ハン・デル・ストルプ」という和蘭名を持つ蘭学者であった。侯は源内を督して

文化七年（一八二四）に蘭和辞書二卷を編成し、また馬場佐十郎に命じて『蘭語訳選』を撰述させている。

文化九年（一八二六）シーボルト一行の江戸参府の報が伝わると、侯はシーボルトと存分の交際をしたいものと思ひ立ち、隠居届を提出して自由の身となり、その日の来るのを待ちわびるのであった。

同年四月十日（わが三月四日）シーボルトの一行の乗る駕籠が、蒲田村の旅宿に着くと、そこには島津老侯（重豪）と中津侯（昌高）が待ちうけておられ、シーボルトを一間に招じ、歓迎の意を表し、中津侯は明瞭な和蘭語で挨拶をされた。シーボルトの江戸到着の翌十一日の夜には、中津侯は蘭語を解する二、三の供を連れ、微行してシーボルトの宿る長崎屋を訪れ、夜更けるまで歓談して帰ってゆかれた。その夜のおもしろおかしい情景は、シーボルトの『江戸参府紀行』に詳しい記述がある。

中津侯奥平家中屋敷が築地明石町にあったことは先にも一言したが、侯は中屋敷に「和蘭室」を設け、オランダ製の器物を陳列し、硝子張りの障子をしつらえて、居ながらにして江戸湾の風光を眺望して楽しまれたという。侯の没したのは安政二年六月十日、

享年八十五歳。その肖像画の写真が、呉秀三博士訳『シーボルト江戸参府紀行』に載せてあるので、抄写してここに附載した。

文 献 紹 介

資生堂版 「銀 座」

B 6版。口絵写真二八頁。本文三五八頁。クリーム色タロース表紙に、薄緑の籠字で銀座と現わし、右方に細い金線の唐草紋様が舞っている。巻頭の口絵として、錦絵「東京銀座主要路煉瓦石造之図」の色刷木版画をおき、銀座に関する五・六枚の写真載せる。その中には、明治四年の銀座大火の瓦版の写真（和田千吉氏蔵）や、「銀座にて用ゐし金箱」（広瀬辰五郎氏蔵）などという珍らしい写真がある。大正一〇年一〇月一五日発行。編輯兼発行者三須裕。発行所は資生堂化粧品部。銀座に関する著書はおそらく十指を越すであろう。その内、本書ほど愛情籠っている本はすくない。複製本を出して貰いたいような本である。内容がまた良い。当代の名士五三氏に執筆を依頼しているの、豊富な話題が万花鏡のように紙上にキラめいて

いる。

明治時代の銀座の貴重な記録といつてよい。

本文の目次を掲げておこう。

銀座	山下 重民	銀座に就ての感想	中村歌右衛門
江戸より東京へ	三田村 鳶魚	「煉瓦」当初の洋服店と	新川伝次郎
煉瓦町の銀座	林 若樹	改築前後の料理店	小柳 久三
煉瓦の起源などに就て	石井 研堂	銀座の勸工場	志摩 三郎
銀座通	舟野源五郎	岸田吟香翁の事ども	宮川 曼魚
銀砂子	久保田米斎	大民の人形	大島 宝水
「煉化懐古」	永井 小石	読売新聞社を中心として	福原 有信
銀座の思い出	戸川 残花	其附近の変遷	
銀座に就ての会話	岡野 知十	「銀座と私の店」	
銀座の話	岡本 昆石	「銀街小誌」	
銀座は昔から	淡島 寒月	「東都花容月影譜」の	
ハイカラな所	久保佐四郎	新橋と銀座	
分銅を掘出した	石屋の留さん	銀座の夜一歌一	
「買物帳」から見た	武田 信賢	銀座の去来	与謝野 寛
「煉瓦」の時からある	山田 残香	銀座の野趣	川路 柳虹
銀座の店舗	大岡 育造	東京のピカデリー	馬場 孤蝶
新聞社街であつた銀座	関根 黙庵	銀座の建築	上 司 小 劍
仮名読新聞のことなど	高橋 善一	紫の灯一歌一	笹川 臨風
旧新橋停車場の周囲	松林 伯知	其の頃のプランタンの灯	黒田 鵬心
銀座の寄席	竹川 澄彦	銀座の柳よ	佐々木 信綱
明治二十五六年頃の	卯月 登美	銀座印象	生田 葵
新橋花柳界の今昔	杉村楚人冠	銀座覚え帳	辻 衛
銀座から六本木までの	半井 桃水	銀座街一詩一	松山 省三
車賃八銭		銀座尾張町一詩一	平岡権八郎
日本文明の発起点		銀座にて	松崎 天民
		銀座の Rendez vous	柳沢 健
			矢部 季
			水木 京太
			鈴木泉三郎
			(以下割愛)